平成 27 年度　第 63 回全国商業教育研究大会　参加報告

岡山県立玉島商業高等学校　　行成　貴由

大会テーマ
「新たな可能性への挑戦　－創造性・実践的商業教育－」

８月３日（月）１０：００～

１．開会式

戸田勝昭全商協会理事長　戸田勝昭氏より、商業高校の現状や取り巻く厳しい状況を踏まえ挨拶があった。来賓祝辞では、文部科学省初等中等教育局主任視学官　水田功氏より職業高校の生徒数が平成 26 年度前年から 5,454 人減少の内、商業高校の生徒数が 2,694 減少など取り巻く環境の厳しさや、さらに事務職に就職する生徒の割合が低い現状の説明があり、ますます商業高校の存在意義を問われているという挨拶があった。

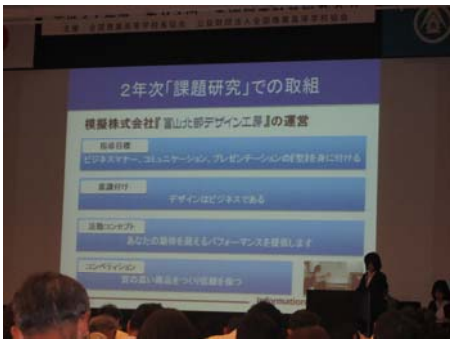
２．全体会研究発表および協議

全体会共通テーマ
「授業力向上を目指した商業教育の取り組み」

〇商業高校における知的財産教育の取組
　－創造的・実践的商業教育の実現と授業力向上を目指して－
　甲府市立甲府商業高等学校　教諭　秋山盛富
〇近江商人再生プロジェクト
　－近江証人の足跡を訪ねて－
　滋賀県立八幡商業高等学校　主幹教諭　神崎善明
　　教諭　　細見ゆかり
〇ネットショップ実習を通した思考力・判断力・表現力の育成
　－広島市商ドッドコムの取組み－
　広島市立広島商業高等学校　教諭　松尾一俊
〇職業人育成のためのアクティブラーニング
　－地域社会と連携したコミュニケーション能力を高める実践指向型学習－
　富山県立富山北部高等学校　教諭　山科博子
　　教諭　廣川真紀子
　　教諭　丸本久夫

各学校大会テーマ、全体会共通テーマにふさわしい発表であった。特に八幡商業は、近江商人「三方よし」と「物産回し」を実践するため東北地方へ１週間販売実習を行った実践発表であった。
富山北部高校は情報デザイン科の生徒のデザインを地元の製薬メーカーの薬のパッケージ制作の実践発表

を行い、各学校とも質の高い取り組みであった。
商業高校でのツール指導に重きを置いた従来の指導から商業の本質を見直せるものであり、今後の商業教育を考える上で大切になってくるものであった。



８月４日（火）９：１５～

３．分科会

（第４分科会　総合的科目について（ビジネス実務・課題研究・総合実践等）

〇行政・地域・産業界と連携した商業教育の効果と検証
　－官公庁、ユニクロ、楽天、ヤマト運輸との連携－
　愛知県立南陽高等学校　教諭　渡辺力樹
　　教諭　柘植政志
〇地域産業界が求めるビジネスリーダーの育成を目指して
　愛知県立豊橋商業高等学校　教諭　青山将典
〇地域構成型ジグソー法を用いた授業の展開
　－協調学習による授業の成果と課題－
　埼玉県立吉川美南高等学校　教諭　松本泰雅
〇商業開発へのアプローチ
　大分県立大分商業高等学校　教諭　山下智史

産業界との連携について教育効果を検証しようとした南陽高校の取組は真新しさを感じた。特に楽天との連携教育は興味深くマーケティングやプレゼンテーション能力向上には効果があるのではないかと感じた。また、豊橋商業では、インターンシップを丸一日（年間１１日）行うカリキュラムは実践的商業教育を意識した取組となっていた。同校では、グローバル教育としてアメリカオハイオ州への研修を実施しており、費用も学校から補助金（同窓会予算）を出している。

８月５日（水）９：３０～

４．「落語に学ぶビジネス・コミュニケーションと商業教育への期待」
落語家・真打　三遊亭楽春

５代目円楽に入門、修業時代の厳しかった師匠の言葉や教えを講演、特に雑務をしている最中師匠仲間の話を聞いて芸に生かそうという気持ちが無かった時、師匠から「耳が遊んでいる」と教えてもらった。寄席の入場の太鼓をはじめて担当した時「気持ちが入っていない太鼓ではお客は入らないと」叱られたなど、心の在り方や気持の入ったコミュニケーションが大切と講演を締めくくった。

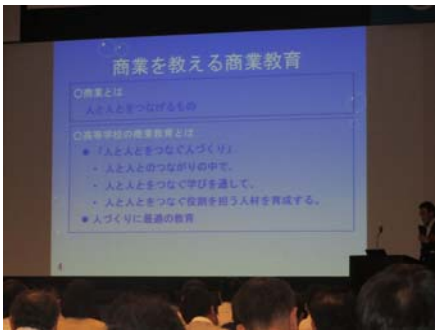
５．「講評」

文部科学省初等中等教育局児童生徒課産業教育振興室　教科調査官　西村修一

○商業に関する学科の現状に向き合っているか。
平成 26 年度前年から 5,454 人減少の内、商業高校の生徒数が 2,694 減少など取り巻く環境の厳しさや、さらに事務職に就職する生徒の割合が低い現状を商業の教員が、理解しているか。ますます商業高校の存在意義を問われている。

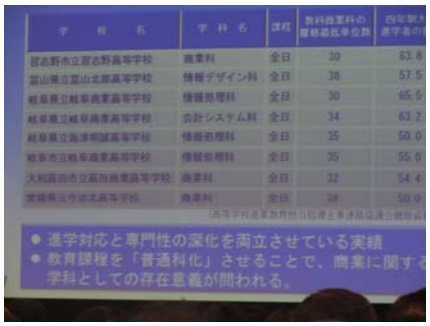
○商業をおしえているか。
人と人を繋ぐものが商業。
「人と人を繋げる人を作る」そういうことを意識してほしい。

○商業の専門性を高めているか。
大学とは違い、学問をしているわけではなく実学（働く力）を身につけさせることが大切。
学問の難しいことが専門性ではなく、社会で活用できることが専門性である。基礎学力が高くなくてもできる。勉強ができることと仕事ができることに相関関係は見出せない。答えが無い時代又は答えがたくさんある時代に対応しなければならない。検定試験は答えが一つ。こういう意味での専門性を身に付けさせることが大切。



○商業教育はイベント等を行うことが目的か。
売上が成功ではなく、「そこから何を学ばせたいか」あるいは、生徒が「何を学んだか」が大切なこと。
そこが、評価の判断基準であり、教科の中で学ばせることが重要である。（課題研究では不十分）

○言語活動等は検定合格率はさがるのか。
アクティブラーニングを実践して受かる検定でなくてはならない。言語活動をすることで、理解が深まらなければならない

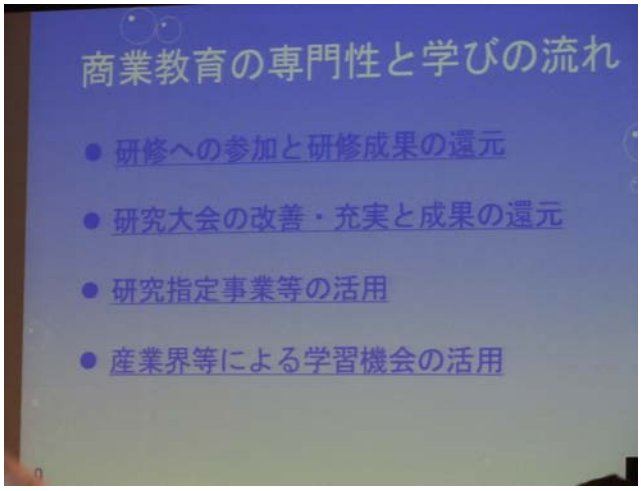


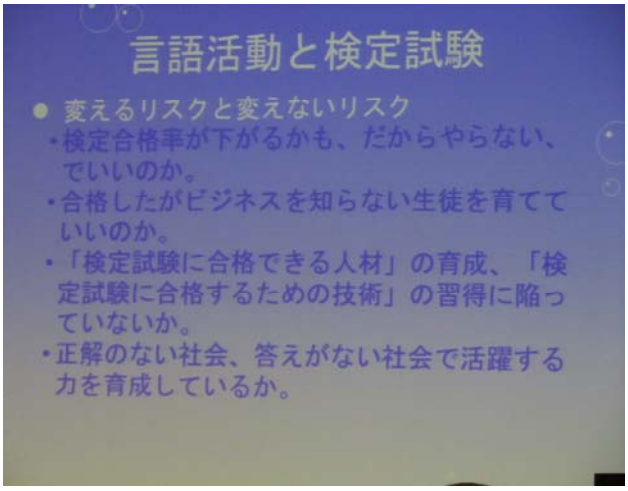
○専門性を薄めなければ進学対応はできないのか。
商業高校の単位数を減らさなくても進学はできる。
商業高校生として自信をもった生徒を大学に進学させ専門教科をすでに学習している優位性を活用させる。

○人材育成は商業科の先生だけで行うものか。
損益分岐点を数学先生で説明するや商業デザインの授業を美術の先生と一緒に指導するなどの取組みを

実践している学校もある。

〇学習指導要領を確認しているか。
折にふれ、学習指導要領を確認してほしい。





６．まとめ

第６３回全国商業教育研究大会に参加し、大変勉強になった。
商業高校は従来のツール指導から脱却し、アクティブラーニングへと変化していかなければならない中で、先進的な研究やその成果を感じることができた。文部科学省初等中等教育局児童生徒課産業教育振興室　教科調査官　西村修一先生の講評にある（前述）８つのキーワードが心に響いた。生徒と同様、大会に参加したことが重要なことではなく、学校現場でどのようにいかしていくか、あるいは、生徒にどれだけ還元できるかが大切である。
生徒が社会で逞しく生きていくための実践に取り組んでいきたい。